九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

[028]九州人類学会報表紙奥付等

https://hdl.handle.net/2324/2320978

出版情報：九州人類学会報. 28, 2001-07-07. Kyushu Anthropological Association
バージョン：
権利関係：

巻　頭　言

よそおいを新たにした九州人類学研究会報28号をお届けします。新たなのは、今回から会員の投稿という形式をとり、例会の発表を活字にするというこれまでのやり方を変えたことです。この改変にはいくつか理由がありました。そのうちの大きな２点について書いてみます。

まず第一に、例会のやり方を変えました。年４回で、うち６〜７月が総会＋講演会、３月が修士論文発表会というパターンは同じですが、残りの２回を特輯のかたちにしています。昨年の例では、沖縄文化の地政学と、ヒンドゥー的差別の人類学の２回でした。いずれも発表２人，コメント２人という大人数で５時間近くの長丁場になります。この企画のおおもとは、参加者の増加と活気づけにあり、１人の発表よりは複数の発表とコメントによって議論の空間をつくりたいということでした。たしかにその効果はあったのですが、いかんせん、九州地区はおたがいに遠方であり、かつ主題と視角の交叉という点でかならずしも選択肢が多いとはいえません。いきおい多少とも遠方の30代40代の研究者たちに声を掛け、それを20代と50代以上がとりまきつつ、ときに集中講義の方々をまきこんでの小シンポジウムづくりになりました。そうなると例会発表を活字にする、というよりは、例会は例会として何とか活気ある議論の場にしながら、会報にはより若い人々を中心にした論文を掲載する、という一種の分割形式のほうが望ましく思われるのです。

これと関連して第二に、九州人類学研究会がそもそも九大を拠点としてきたいきさつから、九州といえど圧倒的に福岡中心であり、これに北九州・大分・佐賀・長崎がかろうじて参加できる心理的距離内にあるという事情がありました。たしかに高速道の発達とJRの特急整備から、熊本・鹿児島・宮崎とも日帰りが可能ではあるのですが、それでもかなり頑張らないと何でわざわざというくらい遠いことに違いありません。とすると発表者も北九州地域に比重があり、発表と論文を連動させるなら、おのずと論文掲載にもかたよりが出る結果になります。それを少しでもあらためたい、と考えました。特輯形式によって例会参加の心理的距離を短くしながら、発表と論文を切り離すことで地区内遠方からの投稿を可能にするというのが、さしあたりの方策でした。

こうして手さぐり状態のなかで、その趣旨は、若い研究者の卵たちが研究への活力と気概と、そしてできれば実践的な思索を養う場をつくることにあります。ここいく年かの間にも、各地に修士課程を中心とした大学院が出来ており、院生人口は確実にふえているのですが、学生・院生同士のヨコのつながりはまだまだ希薄と思われます。そして同世代のヨコのつながりのもつ意味の大きさは、いくらか年輩の先生方には体験的によくお分かりのことでしょう。そうした機会を拡大するための方法は、九州人類学研究会のような大学横断的な会に出席すること、あるいは論文を投稿することです。もちろん日本民族学会でよいわけですが、それではいきなりの全国です。ここはひとつ、ナショナルではないが、ただのローカルでもないこの会の例会と会報に参加し、おおいにレッスンをという地に足のついた方針が望まれます。

若手の奮起をこころまちにしながら、しばらく模索したいと思うのです。よりよい例会と会報づくりのために会員諸氏のご協力をお願いいたします。

2001年６月５日　　九州人類学研究会会長　　關　　一敏